第2講　論説文②　長い記述

記述の手順／要素に分ける／本文に線を引く／字数を調整する／部分点の取り方

読み方のコツ 10分 | 例題 10分 | 練習 30分 | 作文 15分 | 確認テスト 10分

読み方のコツ1　長い記述は四つの手順で書く

入試の形　「本文中のことばを使って七十字以上、八十字以内で書きなさい。」まとめ文の空欄に入れる形で、八点の記述には部分点がある。七十字をこえる記述が続いて出ており、最も長いものは百五字である。

一　**空欄の前後を読む**　空欄のあとが「ということ。」か「から。」かで、文末が決まる。前後に書いてある内容は、答えに書かない。

二　**要素に分ける**　何を書けば答えになるかを、二つか三つに分ける。めやすは四十字で二つ、八十字で三つ、百字で三つか四つ。

三　**本文に線を引く**　要素ごとに、本文の部分に線を引く。傍線のすぐ近くだけでなく、はなれた段落に答えがあることも多い。対比の両方、理由と結果の両方を探す。

四　**要素をつないで書く**　「AなのでB」「AではなくB」の形でつなぐ。本文のことばを使い、具体例は「記録」「知識」のような全体を表すことばに直す。

問一　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ほめられると、人は意欲がわく。しかし、結果だけをほめられ続けると、失敗すればほめられないと感じるようになり、新しいことに挑まなくなることがある。したがって、人をほめるときには、結果よりも、工夫や努力の過程に目を向けることが大切である。

筆者が、結果よりも過程に目を向けることが大切だと述べるのはなぜか。その理由についてまとめた次の文の［　　］に入る内容を、本文中のことばを使って三十字以上、四十字以内で書きなさい。

結果だけをほめられ続けると、［　　］から。

読み方のコツ2　字数の調整と部分点の取り方

字数が多いとき　①具体例を消す　②同じ内容のことばを一つにまとめる　③「とても」「実際に」のような飾りのことばを取る。要素そのものは消さない。

字数が足りないとき　書きのばすのではなく、要素が足りていないと考える。本文にもどり、理由や対比のもう片方を足す。

文の形を整える　主語と述語が合っているかを確かめる。空欄のあとの「ということ。」につなげるので、答えの中に「～こと」を重ねない。読点は要素の切れ目に打つ。

部分点の取り方　採点は要素ごとに行われる。八点の記述は「三点・三点・二点」のように分かれていると考えるとよい。全部そろわなくても、要素が一つ書ければ点が入る。時間がないときは、筆者の主張にあたる要素から先に書く。空欄のまま出さない。

問一　次の文を、三つの要素（同じ映画を見たこと・二人が心を動かされたところ・感じ方がちがっていたこと）を落とさずに、三十五字以上、四十字以内に短くしなさい。

友人と同じ映画を見に行ったが、帰り道に話してみると、友人は映像の美しさに心を動かされ、私は音楽のすばらしさに心を動かされていて、同じ映画を見たのに感じたことがまるでちがっていたのである。

問二　日記を書き続けるよさをたずねる記述の問いを、「①その日の出来事をふり返ることができる（2点）　②自分の気持ちを整理することができる（2点）」で採点する。次の答案は何点か。数字で答えなさい。

「日記を書くと字が上手になって、自分の気持ちを整理することができる」

例題　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

陸上の長距離走は、ふつう、一人で記録を競う競技である。これに対して、駅伝は、長い道のりを何人かで分けて走る。区間ごとに走るのは一人だけであり、走っているあいだ、仲間の助けを借りることはできない。

それでも、駅伝はまぎれもなく団体の競技だと感じられる。①その理由は、たすきにある。選手は、前の走者の汗のしみたたすきを受け取り、次の走者へ手渡す。走者どうしが同時に力を合わせることはなくても、一本のたすきによって、順番に責任を引き受け合っているのである。

協力とは、必ずしも同じ場所で同時に力を出すことではない。時間をへだてて互いを信じ、自分の区間を走り切ることもまた、協力の一つの形なのである。

（創心館オリジナル文章）

例題の問いと解き方

問一　①その理由とあるが、駅伝が団体の競技だと感じられるのはなぜか。その理由についてまとめた次の文の［　　］に入る内容を、本文中のことばを使って四十字以上、五十字以内で書きなさい。

駅伝では、［　　］から。

問二　筆者は、協力についてどのように述べているか。本文中のことばを使って四十五字以上、五十五字以内で書きなさい。

解き方　問一　手順一：空欄のあとは「から」。理由を書く。手順二：要素は二つ。①走者はどのような関係か、②それを結ぶものは何か。手順三：第二段落の「同時に力を合わせることはなくても」と「一本のたすきによって、順番に責任を引き受け合っている」に線を引く。手順四：「なくても」でつなぐ。**同時に力を合わせることはなくても、走者どうしが一本のたすきによって順番に責任を引き受け合っている**（四十八字）。**採点のポイント**（6点）①同時に力を合わせるのではない（2点）②たすきによって順番に責任を引き受け合う（4点）。「汗のしみた」のような細かいことばは入れない。

問二　最後の段落は「AではなくBもまた」の形。要素はAとBの二つ。Aだけでは筆者の考えにならない。**同じ場所で同時に力を出すことだけでなく、時間をへだてて互いを信じ、自分の区間を走り切ることも協力である**（五十一字）。「自分の区間」は駅伝のことばだが、本文の最後の文にあるのでそのまま使ってよい。

練習　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。（入試の形）

幼いころの記憶として、私には忘れられない場面がある。三歳の夏、大きな麦わら帽子をかぶった私が、父の腕に抱かれて海辺の波を見ている。ところが、あるときふと気づいた。その場面の中で、私は帽子をかぶった自分の姿を見ているのである。人の目は、自分の顔を見ることができない。自分の姿が見えている以上、それは当時の私の目に映ったものではありえない。アルバムを開いてみると、はたしてそこには、同じ構図の一枚の写真が貼られていた。私が「覚えている」と信じていたものは、くり返し見たこの写真から、あとになって作り上げられたものだったのである。

記録と記憶について、私たちはふつう次のように考えている。記録は外に残された確かなものであり、記憶は頭の中にあるあいまいなものである。だから、両者が食いちがえば、正しいのは記録のほうだ、と。たしかに、日付や出来事の順序を確かめるときには、この考えは正しい。歴史の研究が史料を重んじ、人々が約束を文書に残すのも、そのためである。しかし、①この考えには見落としがある。先の写真の例が示しているように、記録と記憶は別々に存在しているのではない。記録は記憶の中に入りこみ、記憶の中身を作りかえていくのである。

見落としはもう一つある。記録そのものも、見かけほど中立ではないということだ。写真には、カメラの向けられた範囲しか写らない。撮る人が何を中心にするかを決めたとき、そのほかのものは画面の外へ押し出される。海辺の写真の枠の外には、砂浜で退屈している兄がいたかもしれないし、シャッターを押しながら笑っている母がいたはずである。日記も同じである。その日に起きたことのすべてを書く人はいない。書き手は書くことを選び、書かないことを捨てている。さらに、ありのままのつもりで書いても、ことばにできるのは経験のほんの一部である。つまり記録とは、起きたことそのものではなく、②だれかの手で切り取られた断片なのだ。

記録が切り取られたものであることは、それ自体としては欠点ではない。忘れてならないのは、残された断片が、やがて過去の全体であるかのように見えてくることである。卒業アルバムをめくると、体育祭や修学旅行の写真が並んでいる。数十年後にそれを見た人は、中学校の三年間を、行事に満ちた晴れやかな日々として思いえがくだろう。だが、実際の学校生活の大半を占めていたのは、ありふれた休み時間や、雨の日の教室の静けさであったはずだ。そうした時間は、写真に残らないために、やがて当人の記憶からも薄れていく。記録に残ったものは何度も見返されてますます確かになり、残らなかったものは思い出すきっかけを失って消えていく。こうして、記録は、過去を保存するだけでなく、③過去を選別する働きもしているのである。

（前のページの文章の続き）

同じことは、個人の思い出だけでなく、社会についても言える。ある町の歴史を年表にすれば、橋が架かった年や学校が建った年は書きこまれる。しかし、その橋を毎日渡っていた人々の暮らしは、ほとんど書きこまれない。文字を書く機会のなかった人の経験は、記録の外に置かれたままである。私たちが「昔はこうだった」と語るとき、それは多くの場合、記録を残すことのできた人の目を通した過去なのである。教科書で学ぶ歴史も、こうした選別をへて私たちに届いている。

近年、私たちは写真や文章を手軽に残せるようになった。記録が増えれば、それだけ過去の全体に近づけるように思える。だが、ことはそれほど単純ではない。私たちが残すのは、やはり人に見せたい場面、残したいと思った場面である。写真が一万枚あっても、撮らなかった場面は一枚もない。残された一万枚は、残されなかった無数の場面を語ってはくれない。記録の量が増えるほど、④残らなかったものの存在は、かえって見えにくくなるのかもしれない。

では、記録とどのように向き合えばよいのだろうか。大切なのは、記録を疑って捨てることではない。記録がなければ、私たちは過去について確かめることさえできない。記録を疑うことと、記録を読み深めることとは別である。必要なのは、⑤記録を読むときに、その外側を想像することである。この写真を撮ったのはだれか。枠の外には何があったのか。なぜこの出来事は書かれ、あの出来事は書かれなかったのか。そう問いながら読むとき、記録は、完成した過去の姿ではなく、過去へ向かうための入り口になる。残されたものを手がかりに、残されなかったものに思いをめぐらす。過去を知るとは、そのような営みなのである。

（創心館オリジナル文章）

問一　筆者が、海辺の場面は当時の自分の目に映ったものではないと考えたのはなぜか。その理由として最も適しているものはどれか。次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　場面の中の麦わら帽子が、アルバムの写真の帽子とはちがっていたから。

イ　三歳のころのことを覚えているはずがないと、家族に言われたから。

ウ　場面の中に、自分の目では見ることのできない自分の姿があったから。

エ　海辺へ行ったという記録が、アルバムに残っていなかったから。

問二　①この考えには見落としがあるとあるが、筆者は二つの見落としを述べている。その内容についてまとめた次の文の［　a　］、［　b　］に入れるのに最も適しているひとつづきのことばを、本文中からそれぞれ抜き出しなさい。ただし、［　a　］は十三字、［　b　］は十一字で抜き出すこと。

記録と記憶は別々に存在しているのではなく、記録は［　a　］という点と、記録そのものも［　b　］という点。

a

b

問三　②だれかの手で切り取られた断片とあるが、どういうことか。その内容についてまとめた次の文の［　　］に入る内容を、本文中のことばを使って四十五字以上、六十字以内で書きなさい。

記録とは、［　　］ということ。

問四　記録に残らなかったものはどうなると筆者は述べているか。本文中から十七字で抜き出し、初めの五字を書きなさい。

問五　③過去を選別する働きとあるが、どういうことか。その内容についてまとめた次の文の［　　］に入る内容を、本文中のことばを使って七十字以上、八十字以内で書きなさい。

記録は、［　　］ことで、過去を選別している。

問六　④残らなかったものの存在は、かえって見えにくくなるとあるが、その理由として最も適しているものはどれか。次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。［　　］

ア　記録が増えるほど、残す価値のある場面が少なくなっていくから。

イ　多くの記録も人が選んだ場面にかぎられるのに、過去の全体がそろっているように思えるから。

ウ　記録が増えると、それを整理することに追われて、過去をふり返らなくなるから。

エ　手軽に残された記録は、手間をかけて残された記録よりも正確さがおとるから。

問七　⑤記録を読むときに、その外側を想像することとあるが、筆者がこれを必要だと考えるのはなぜか。本文全体をふまえてまとめた次の文の［　　］に入る内容を、本文中のことばを使って九十字以上、百字以内で書きなさい。

記録は、［　　］から。

作文の型2　資料の差を読んで考えにつなぐ（15分）

資料の読み方　二つの年度を比べるときは、いちばん多いものより「**差が大きいもの**」を見る。増えたものと減ったものを一組で取り上げると、変化の向きがはっきりする。数値を挙げてから、自分の考えへつなぐ。

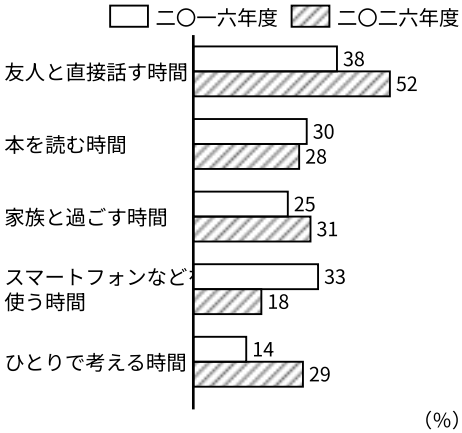
第2講の作文　前半の二つのまとまりを書く。入試の時間のめやすは、三百字で十五分。

作文2　これからの生活で、どのような時間を大切にしたいか。【資料】をふまえて、あなたの考えを、次の条件1・2にしたがって、二百字以内で書きなさい。

条件1　最初に、二つの年度を比べて読み取ったことを、数値を挙げて書くこと。

条件2　次に、読み取ったことをふまえて、あなたが大切にしたい時間とその理由を書くこと。

【資料】中学生が「もっと増やしたい」と思う時間（複数回答）



（調査の対象：中学生300人）

確認テスト（10分・100点）　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

長さの単位は、もともと人の体をもとにしていた。両手を広げた長さを表す「ひろ」や、足の大きさから生まれた「フィート」がその例である。道具がなくても測ることができるので、これらは暮らしの中で長く使われてきた。

［　A　］、体の大きさは人によってちがう。遠くはなれた土地の人と物の長さを比較するには、だれにとっても同じ基準が必要になる。こうして生まれたのがメートルである。メートルは、特定の人の体とは関係なく、地球の大きさをもとに定められた。

共通の単位のおかげで、私たちは世界中の人と同じ数字で話ができるようになった。ただ、その便利さと引きかえに、自分の体を使って物の大きさをつかむ感覚は、失われつつあるのかもしれない。

（創心館オリジナル文章）

問一　［　A　］に入れるのに最も適していることばを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。（25点）

ア　たとえば　　イ　また　　ウ　しかし　　エ　すなわち

問二　本文中の「比較」と熟語の構成が同じものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。（25点）

ア　登山　　イ　岩石　　ウ　高低　　エ　県立

問三　メートルが生まれたのは、どのようなものが必要になったからか。本文中から十一字で抜き出しなさい。（25点）

問四　筆者は、共通の単位について、どのようなよさと問題があると述べているか。本文中のことばを使って三十字以上、四十字以内で書きなさい。（25点）

解答（答えと短い解き方）

第2講　論説文②　長い記述

コツ1の確かめ

問一　（例）失敗すればほめられないと感じるようになり、新しいことに挑まなくなることがある（三十八字）

採点の要素：「結果だけをほめられ続けると」のあとの、①失敗すればほめられないと感じる　②新しいことに挑まなくなる。

コツ2の確かめ

問一　（例）同じ映画を見たが、友人は映像に、私は音楽に心を動かされ、感じ方がちがっていた（三十八字）

くり返しの「同じ映画を見た」を一つにし、「帰り道に話してみると」「美しさ」「すばらしさ」を取る。三つの要素が各1点。

問二　2点

②は書かれているので2点。「字が上手になって」は①とちがうので0点。要素ごとに見る。

練習　論説文（入試の形）

問一　ウ

第一段落「人の目は、自分の顔を見ることができない」と合う。エは本文と逆（同じ構図の写真が貼られていた）。

問二　a　記憶の中身を作りかえていく　b　見かけほど中立ではない

a：傍線のあとの「記憶の中身を作りかえていく」。b：「もう一つ」が二つ目の印。そのあとの「見かけほど中立ではない」。

問三　（例）起きたことそのものではなく、撮る人や書く人が選んだ一部だけが残ったものであり、その外側のことは残らない（五十一字）

採点の要素：①起きたことそのものではなく、その一部である　②撮る人や書く人が選んだものである。

問四　思い出すき

第四段落「残ったものは……、残らなかったものは……」の対比。「思い出すきっかけを失って消えていく」（十七字）。

問五　（例）残ったものは何度も見返されてますます確かになる一方で、残らなかったものは思い出すきっかけを失って消えていき、残された断片が過去の全体のように見えてくる（七十五字）

採点の要素：①残ったものは見返されて確かになる　②残らなかったものは消えていく　③断片が過去の全体のように見える。

問六 ィ

第六段落の「過去の全体に近づけるように思える」と「残したいと思った場面である」を結びつけたもの。

問七 （例）起きたことそのものではなく、だれかの手で切り取られた断片であるのに、くり返し見られるうちに過去の全体であるかのように見えてきて、残らなかったものや記録の外に置かれた人々の経験を見えなくしてしまう（九十七字）

採点の要素：①だれかの手で切り取られた断片である　②断片が過去の全体のように見える　③残らなかったものが見えなくなる。

作文2

（解答例　百八十字）

資料を見ると、スマートフォンなどを使う時間を増やしたい人が三十三％から十八％に減り、ひとりで考える時間は十四％から二十九％に増えている。私が大切にしたいのも、ひとりで考える時間である。友人の意見にすぐ返事をしていたころは、自分の考えがわからなくなることがあった。一晩おいて考えてから話すと、落ち着いて伝えられたからである。これからも、考える時間を持ちたい。

採点の要素：①二つの年度の差を数値を挙げて書く　②大切にしたい時間が資料とつながり、理由が具体的　③表記。

確認テスト

問一 ウ　（25点）

前は「長く使われてきた」、あとは「人によってちがう」で、前の内容の問題点を述べている。逆接の「しかし」。

問二 イ　（25点）

「比較」は似た意味の字の組み合わせ。イ「岩石」も同じ。アは下の字が目的語、ウは反対の意味、エは主語と述語。

問三 だれにとっても同じ基準　（25点）

「こうして生まれたのがメートルである」の「こうして」が指す前の文を見る。「だれにとっても同じ基準が必要になる」。

問四 （例）世界中の人と同じ数字で話ができるが、体で物の大きさをつかむ感覚が失われつつある（三十九字）　（25点）

最後の段落の「おかげで」と「引きかえに」に線を引く。採点の要素：①同じ数字で話ができる　②体で大きさをつかむ感覚が失われる。

くわしい解き方は創心館出版の攻略テキスト（別冊解答）に載っています。